

# 暗黒の時代を、なぜ女性たちは たたかい抜くことができたの

青森市男女共同参画プラザ『カダールフェスタ』(1月29日)



始めて、松橋理事から、昨年開催された全国女性交流会に参加しての報告と感想が話され、その後パンフ「女性解放運動の原点を問う」を教材に学習しました。

「女性はなぜ昔から社会的、政治的、経済的にいたいがれてきたのか?」「わが国の明治以降の女性差別の特徴や原因は?」等々。その昔、女性差別などは無く、むしろ「元始女性はまさに太陽であつた」でした。それが原始社会から階級社会、資本主義社会に進化し、そのなかで支配階級の便利な道具、手段として身分制度がつくられたのです。それらは現代解消されたのでしょうか?

家庭でも職場でも、あるいは地域社会でも、私達自身が気付かずにおちいつている女性差別の例など、意見や体験談がたくさん出されました。

ジェンダー平等は、女性が男性の差別行為や差別意識を攻撃すれば実現できるというものではなく、性の多様性、協力共同をめざすべきものなのです。感想を述べてくれました。「当事者が声をあげることが大事です。」と。

東青支部理事 池辺せつ子

○ 昨年一月から「しんぶん赤旗」を週六日配達して一年になつた。冬期間は、さまざまな条件が重なり、気をつかいながら新聞に目を通し、ホツトな一時四季おりおり、いろいろ楽しい出会いがある。市街の橋に「カモシカ」の親子と遭遇、人なれしているのか、こちらを見て動かない。ある時は「キツネ」に車をとめるとじつとこちらを見つめ、森へ入つて行つた。道路わきでモクモク動いていたのは「タヌキ」遠くでキラッと光つて見えたのは「猫」。道路をさつと通りすぎたのは「リス」。平和でこそんな風景に会うことがでいる。ロシアは、国民の命を奪い、国土、自然破壊など許されるものでない。ロシア軍は、ただちに撤退し、ウクライナに一日も早い平和がおとずれるよう願いたい。

(徳)



No. 585

編集発行人 田中幹夫  
治安維持法犠牲者  
国家賠償要求同盟

〒113-0034  
東京都文京区湯島2-4-4  
平和と労働センター全労連会館内  
電話 03-5842-6461  
FAX 03-5842-6462  
振替 00110-6-97793  
定価 50円

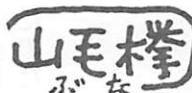
青森県版

2023年3月15日発行

第 369 号

〒030-0904  
青森市茶屋町11番5号  
TEL 017-718-3166  
FAX 017-718-3167

青森県本部



九月十八日、七月七日、十一月八日は

## 問題の本質を浮び上がらせる日

弘前支部

十五年戦争。中国との戦争がいつ始まつたのか。アジア・太平洋への戦火がどのように拡大していったのか。

・一九三一(昭六)年九月十

八日：日本軍が南満州鉄道の線路を爆破した柳條湖事件。「中国兵のしわざ」とウソの宣伝をして武力

侵攻し、満州全域を占領した満州事変の始まり。

・一九三七(昭十二)年七月七日：蘆溝橋事件で中国全土に戦火を拡げていった日中全面戦争へ。

・一九四一(昭十六)年十二月八日：日本が、マレー

半島・英領コタバル上陸、ハワイの真珠湾攻撃、フィリピン、ルソン島の米空軍基地攻撃と、この日三つの地点で先制攻撃を

侵攻する起点の日、始まりの日が十二月八日。

戦争の被害の記憶に比べ、加害の歴史の伝承は難しいと言われていますが、被害を生み出した原因として被害の面に向き合うことが必要です。

「子どもたちが綴つた戦争

体験」シリーズ・全5巻を編んだ村山士郎さんは述べています。

「今のウクライナの悲惨な

戦禍を見て、そこに日本人の戦争体験を重ねるのは、共通することはあるものの、根本的に違うところがある。それは、日本は侵略者の側、今の口

シアの側の戦争体験であつたことである。日本のおこなった侵略戦争の中で、日本人がどれほど他国や他民族を攻撃し、人々の生活を破壊し、命を奪ってきたか。

その資料は私たちの周りにたくさん残っている。私たちが見ようとしているだけなのだ。」

「戦争を語り継ぐ場合、子どもたちに戦争の真実を伝えるには、日本人が多大な被害を被つた事実と同時に、日本人が大陸で何をしたのかという事実をもあわせて伝えなければならないだろう。そして、子どもたちの心中に人を殺すことを当たり前に考える感覚を根付かせたことも。戦争体験を語り継ぐ運動は、日本がアジアで行つた侵略戦争の実をありのままに語り継ぐことにどれだけ意識的だったのだろうか。」



## 東部支部『定例街頭宣伝』



2月20日、猛吹雪の中、新町「さくら野」前での街頭宣伝。

岸田政権の「敵基地攻撃能力」保持の危険性を訴え

「再び戦争と暗黒政治を許さない」の声を上げること、国会請願署名を取り組みました。

### 絵手紙



柳谷マサ子 (むつ市在住)

### 【映画】『わが青春つきるとも・伊藤千代子の生涯』

皆様のおかげで……

三月四日(土)『わが青春つきるとも・伊藤千代子の生涯』上映会、昨秋より上映会準備にあたり、国賠同盟も手さぐり状態で始まりました。が、各民主団体等の方々にも御協力を頂き上映することが出来ました。なにぶん初めての事でしたので、不手際・御迷惑等をおかけしたと思います。御協力頂いた方々・御来場の皆様本当にありがとうございました。

尚、上映会の感想等は三月末迄受付けておりますので、よろしくお願い致します。四月号「不屈」・青森県版に於いて感想等を報告させて頂きますので御了承願います。

※ちなみに、スタッフとして動いていた私は十二時前、アビオ青森に集合し、二回目の上映が終るまで緊張しつづけた。昼食も夕食も食べてない事を終了後に気付きました。

東青支部 細川弘彦

エッセイ

# 私が出した子どもたち……<sup>(51)</sup>

## 家の仕事をする「こじもがじま」した —普段から家の仕事を手伝つてこじもがじました—

相談室 工 藤 ふみ

アイロンをかわた

小3年 育子

きょうもアイロンをかけました。7まいかたすきをかけました。あせをひつしょりかけました。あせをひつしょりかけました。お母さんが「たすかつた」といって、きよしあじちやんは「じょうずだねえ」といってくれました。ありがたいです。大人になつてもアイロンをかけます。

レジの中

小3年 育子

戸を開けた。すると、物ほしやおじやー、せひひー、いろいろな物がかかる。ガラガラ。戸を開けた。

元気出して

小6年 村木

「台風来るかもしないから、りんごの手伝つて行くよ。」母が言つた。台風の次の日の朝、りんごがたつてさん落ちていた。十円玉が二まいど、一千円もつか四まいどくらいしかない。せんたくものはいつないかかっているけど、お金は入つてない

わざと帰るのぢやないで落ちたり、「んじ」を一つずつ拾つた。  
おばあちゃんの所に運んだ。「あう」ね。五百個ぐらゐはあるんじやない。」

「五百個以上はあるよ。なしてこんなことになるんだべ。」おばあちゃんに聞いた。

「おばあちゃんやんに聞いた。なんになるとわかるよ。なしてこんなことにならぬだべ。」

「五個ほどあるよ。なしてこんなことにならぬだべ。」おばあちゃんやんに聞いた。沈んだ声でつぶやいていた。「せつかいくじまで育てたのに」「りんご拾いが終わつてお、」

「はあああ。」と、何回も、何回も、ため息をついていた。

育子の家はクリーニング屋を営んでいた。夏休み、育子は毎日のように仕事の手伝いをした。

その子は、それを読み、育子のことを子ども達も残念がる。

村木も板柳でりんご作つてある祖母の手伝いに行つた事を書いていた。りんご作りは、1、2月の剪定に始まり、摘果、実縁り、葉剤散布、葉取り、つる廻しなどなど、作業は手作業が多く大変である。それらの苦労が、台風通過のわずか数時間で無となるのだ。台風被害のための高い保険料を払える農家は数少ない。

育子の家はチエーン店に押さえた。村木はおばあちゃんの美味しいりんごを使つたのが、店は

なくなつた。

りんご農家だけではない。日本農家も畜産も同じである。日本の政治は一次産業切捨ての歴史であつた。また、個人商店もクリーニング店に限らず、八百屋、果物屋、靴屋、金物屋、豆腐屋など、大型店舗に取つて代わられてしまつた。「自由」という名の元で、農業も商店も、街も失われていつたのだ。国鉄も郵便局も電話局も同じである。

子どもたちが必死で生きた記録と共に、悲しさや悔しさの大元は政治にあつたことを忘れてはならない。

次に紹介する里香の食堂は、移転し小さくしたが、今も営業している。

ちゅうぼうの奥の冷蔵庫から椅子を取り出す。

ドアを開けて店内に入る。

店に入つたらすぐ椅子を入れね。

次に、テーブルに椅子を上げて、軽くほうきではく。

今度は丁寧に掃除機をかむ。

椅子を下ろし、

テーブルにチーズを並べる。

この仕事は、私が行つた時、母の代わりにやる。

お母さんなくさん来ればいいなあ。

今は、3人とも、大人になり、家業とは違う仕事でがんばつていて

「台風来るかもしないから、りんごの手伝つて行くよ。」母が言つた。台風の次の日の朝、りんごがたつてさん落ちていた。

今は、3人とも、大人になり、家業とは違う仕事でがんばつていて